

史跡岩切城跡と周辺の遺跡

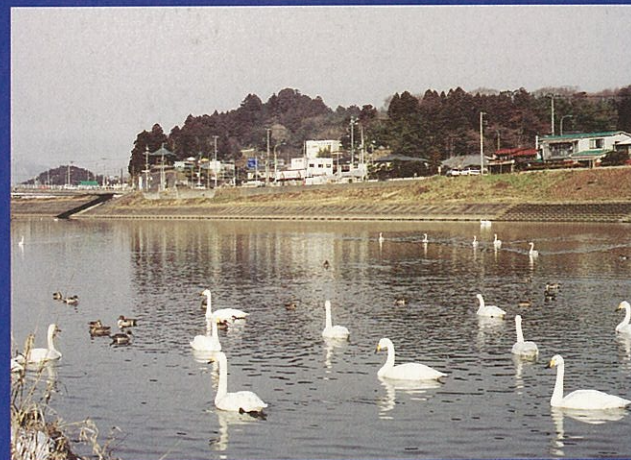
— よみがえる中世 —



【奥州名所図会】（江戸時代・斎藤報恩会蔵）東光寺・岩切城（図の「鴻の館」）志波彦神社付近



東光寺遺跡石窟仏「穴薬師」



白鳥の来る七北田川より東光寺遺跡付近を望む



紅葉の岩切城跡



【一遍上人絵伝】

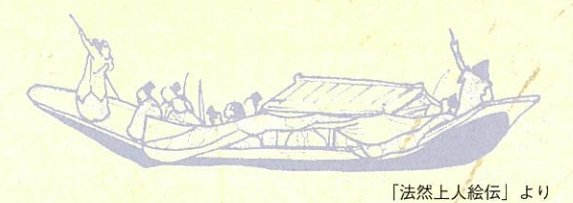
●「法然上人絵伝」（知恩院蔵）「一遍上人絵伝」（清浄光寺・歓喜光寺蔵）に関する図版・イラストは中央公論新社の提供による。
図版協力：斎藤報恩会、東光寺、多賀城市教育委員会、宮城県図書館、仙台市博物館、平井聖
仙台市文化財パンフレット第53集
発行／仙台市教育委員会 ☎214-8893 発行日／平成16年3月



古紙配合率100%再生紙を使用しています

仙台市教育委員会

1. 中世の岩切の繁栄



「法然上人絵伝」より

中世の岩切の繁栄
岩切城跡(国史跡)
霊場―東光寺遺跡
館跡―洞ノ口遺跡
屋敷跡群―今市・鴻ノ巣遺跡など
おわりに

(1) 鎌倉時代の陸奥国の役所

古代の陸奥国（現在のおよそ福島・宮城・岩手県南域）の国府（国毎の行政を行う役所の置かれた所）多賀城は平安時代の10世紀後半には機能を停止していることが発掘調査から推定されています。

そして、長年にわたる発掘調査から鎌倉時代には仙台市宮城野区岩切から多賀城市西部にかけて同時期の遺跡が密集していることがわかったこと、この地域は「奥大道」という鎌倉からの幹線道路と海につながる水上交通の幹線である七北田川が交差する水陸交通の要衝と考えられることから、当時の文献に見える鎌倉時代の国府（「多賀国府」）や町場、市場、そして当時の絵図にも描かれる開発された水田はこの地域にあったと考えられています。南北朝時代の動乱期には国府争奪の舞台となりましたが、室町時代に陸奥国の行政の中心が大崎地域に移るまでこの一帯は陸奥国の中心的な場所として繁栄したのです。



中世の多賀国府と主な遺跡



江戸時代の絵図に描かれる寺社の集中の様子から中世のにぎわいが想像される
【『野初絵図』(宮城県図書館蔵)】



【仙台市】

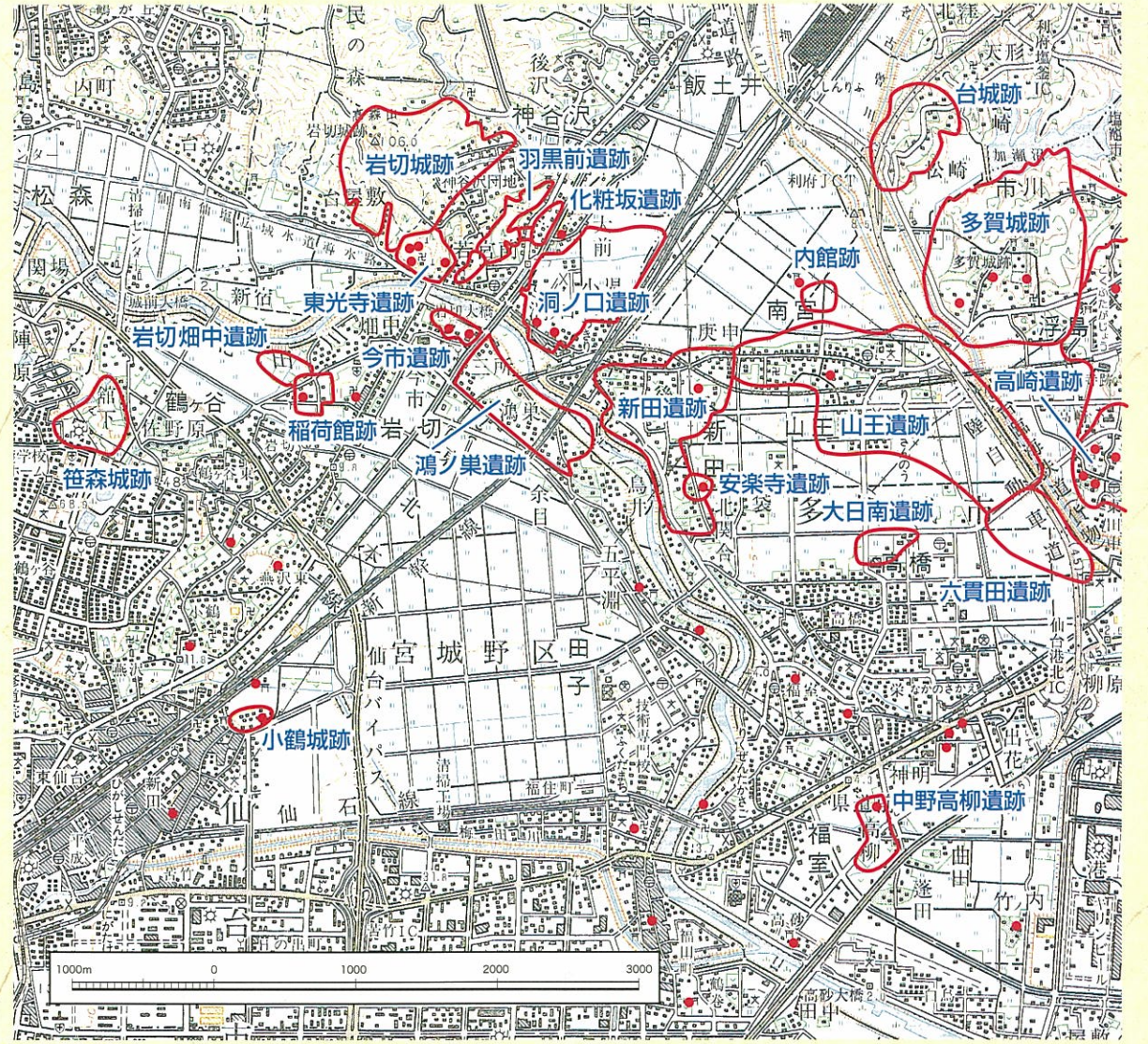
沙弥行妙僧正法讓状
（一）
（二）
（三）
（四）
（五）
（六）
（七）
（八）
（九）
（十）
（十一）
（十二）
（十三）
（十四）
（十五）
（十六）
（十七）
（十八）
（十九）
（二十）
（二十一）
（二十二）
（二十三）
（二十四）
（二十五）
（二十六）
（二十七）
（二十八）
（二十九）
（三十）
（三十一）
（三十二）
（三十三）
（三十四）
（三十五）
（三十六）
（三十七）
（三十八）
（三十九）
（四十）
（四十一）
（四十二）
（四十三）
（四十四）
（四十五）
（四十六）
（四十七）
（四十八）
（四十九）
（五十）
（五十一）
（五十二）
（五十三）
（五十四）
（五十五）
（五十六）
（五十七）
（五十八）
（五十九）
（六十）
（六十一）
（六十二）
（六十三）
（六十四）
（六十五）
（六十六）
（六十七）
（六十八）
（六十九）
（七十）
（七十一）
（七十二）
（七十三）
（七十四）
（七十五）
（七十六）
（七十七）
（七十八）
（七十九）
（八十）
（八十一）
（八十二）
（八十三）
（八十四）
（八十五）
（八十六）
（八十七）
（八十八）
（八十九）
（九十）
（九十一）
（九十二）
（九十三）
（九十四）
（九十五）
（九十六）
（九十七）
（九十八）
（九十九）
（一百）
（以下略）

古文書に記される市場
弘安八(1285)年
【『仙台市史 古代中世』より】

(2) 遺跡にみる岩切の繁栄

岩切地区は東北地方でも有数の中世の遺跡が密集しているところです。

岩切地区の西端に位置する東光寺遺跡は墓所、霊場であり、その背後の岩切城跡は南北朝時代から戦国時代にかけての大規模な山城です。屋敷などの居住地区は七北田川の南岸の今市・鴻ノ巣遺跡、北岸の館跡である洞ノ口遺跡、さらに、多賀城市西部の新田遺跡まで広がっており、当時の町場や市場を含むと考えられています。また、川岸の背後には水田が広がり、塩竈と湊浜には国府に関わる港（津）があったと考えられています。中世の七北田川は七ヶ浜の湊浜を河口としており、多くの物資が船で往来したと考えられます。また、現在、塩竈神社の境内地にある志波彦神社は、もとは東光寺の東側の若宮前遺跡周辺（現八坂神社付近）にあったのです。これらのことから陸奥国府のあった地域（府中）としての岩切地区周辺の繁栄がうかがわれます。



● 板碑所在地
岩切から多賀城市西部にかけての主な中世遺跡【国土地理院発行の5万分の1地形図【仙台】】

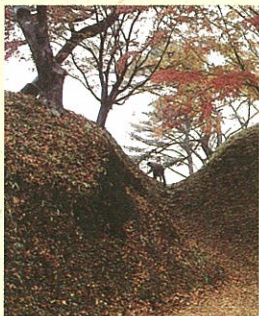
2. 岩切城跡(国史跡)

岩切城跡は高森城(館)・鴻の館とも呼ばれ、岩切から利府町神谷沢に広がる南北朝時代から戦国時代(14～16世紀)の山城です。その範囲は東西約1km、南北約1.1kmと広大です。標高106mの高森山の尾根を削って平坦にし、深い谷の斜面を削ってさらに急にした上、さらに堀で外部からの侵入を断ち切って防衛を固めています。1935(昭和10)年、本丸跡及びその近くで発掘調査が実施され、多数の掘立柱建物跡が確認されました。これは中世の城跡の中で建物跡が確認された全国で最初の例とされています。

南北朝時代、足利尊氏と弟直義の対立の中で1351(観応2)年、それぞれの勢力が岩切城で戦いました。この時、鎌倉時代の陸奥国府留守所長官の子孫である留守氏は大きな損害を受けていますが、後に勢力を盛り返して、戦国時代には岩切城を居城としました。留守氏は戦国時代末期には伊達氏に属して江戸時代に至っています。



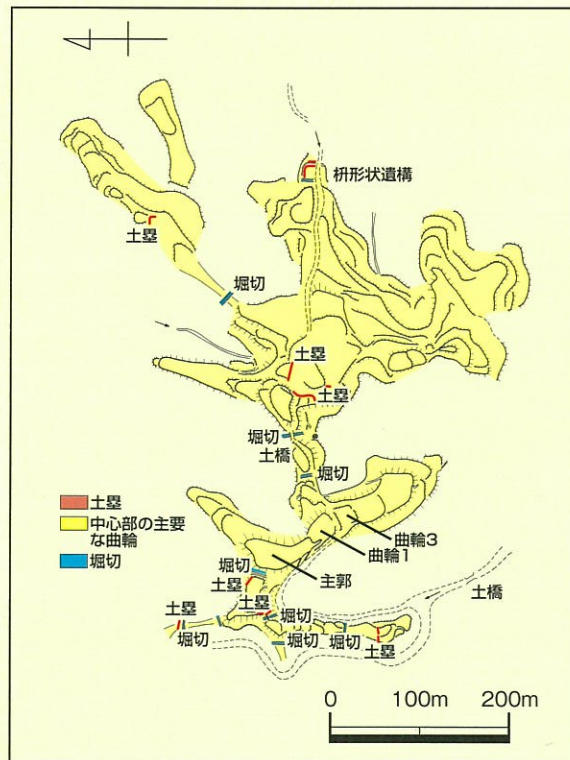
岩切城跡中心部より東南、七北田川流域の洞ノ口遺跡、鴻ノ巣遺跡周辺を望む



深い堀切



出土した陶器(古瀬戸)片



中心部遺構概略図



西部近景
平坦地が段状に重なっている



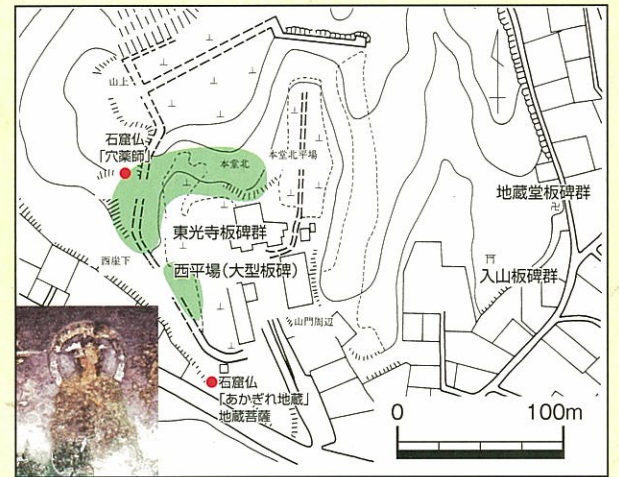
昭和10年の発掘。柱穴などが多数みえる
【伊東信雄「岩切城跡発見の柱穴群」】

3. 霊場 — 東光寺遺跡 —

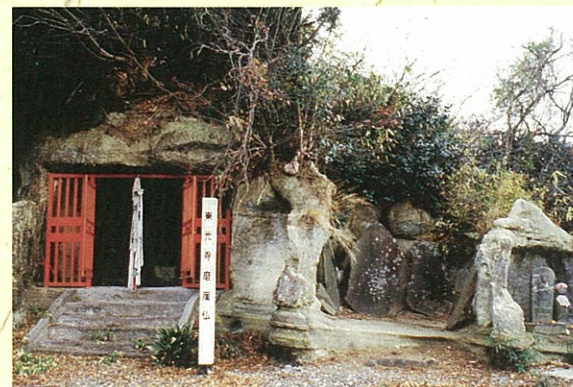
七北田川と富谷丘陵突端の接点に位置し、平安時代に慈覚大師が開いたという伝承が残る東光寺は、鎌倉時代に国府の留守所長官である留守氏ゆかりの寺であり、南北朝時代の古文書にも記される古い寺です。現東光寺の境内には鎌倉時代から南北朝時代にかけての石窟仏(崖を掘りこんで仏像を刻んだもの)や板碑(供養のための板状の石)122基が良好に残っています。石窟仏には慈覚大師が刻んだという伝承のある阿弥陀・薬師如来像(「穴薬師」「宵の薬師」)や地藏菩薩像などがあります。さらに発掘調査により土壇に立つ2基の大型板碑が切石で区画され、納骨穴(火葬骨などを納める穴)を伴うことが分かり、さらに鬼瓦など多数の瓦が出土したことから14世紀頃には瓦葺きの寺院が建っていたと考えられています。この瓦は松島の瑞巖寺境内遺跡(円福寺跡)出土の瓦、さらに茨城県つくば市三村寺跡出土の瓦、さらに奈良の諸寺院との瓦に近似しており、当時仏教の盛んであった奈良からの宗教・造寺活動の波を知ることができます。



中世の寺は上からみて丘が凹んだ地形に造られることが多い



「あかぎれ」地藏
旧状を残している板碑群
東光寺遺跡の石窟仏と板碑群
あかぎれ地藏は移設して東光寺入り口のお堂に納めています



東光寺石窟仏群



石窟仏「穴薬師」【右:薬師如来 左:阿弥陀如来】



「一遍上人絵伝」より

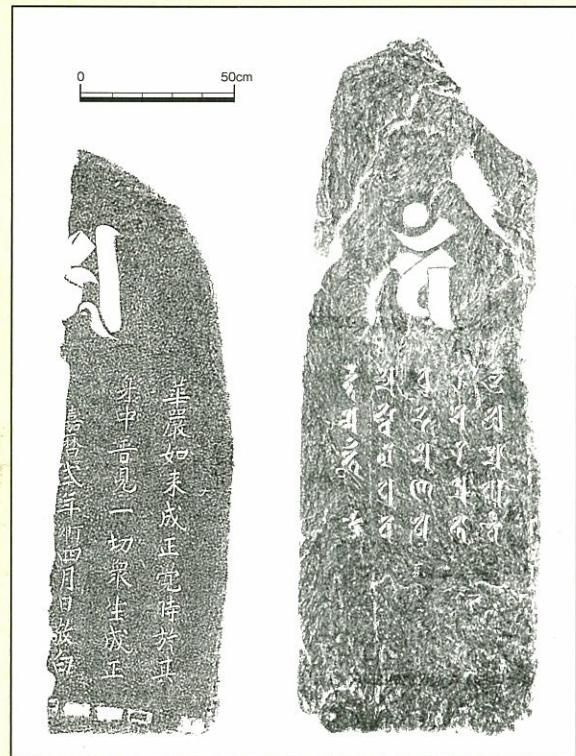
板碑の分布は若宮前・羽黒前遺跡など、東方の丘陵にも広がっています。板碑や石窟仏は仏を供養することにより死者が成仏するという仏教的考え方の中で造られたものです。また、若宮前遺跡の高台では鎌倉時代の掘立柱建物や塚も確認されています。江戸時代の絵図に描かれる若宮前遺跡付近の八幡社や天神社、羽黒前遺跡付近の羽黒社や寺の多くは鎌倉時代までさかのぼると考えられます。景色の良い七北田川北岸背後の丘陵に営まれた寺院、石窟仏、板碑群からなる中世の霊場の景観が残っている所は東北地方でも極めて少なく、貴重な遺跡群です。



江戸時代の東光寺のようす【『奥州名所図会』】
岩に彫られた多くの仏たちが中世の霊場の風景を伝える



西平場の板碑群【大型板碑を小型板碑が取り囲んでいる】



西平場の大型板碑【拓本】
いずれも嘉暦二(1327)年銘で、左は胎藏界大日如来を表す梵字(ア)と「華嚴經」の一節。右は金剛界大日如来を梵字(バン)と光明真言(一切の罪業を除く密教の言葉)が刻まれる(拓本は『仙台市史 板碑』から)



鬼瓦
(左側残存高28cm)

軒丸瓦

軒平瓦

出土した瓦

出土した瓦には軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・鬼瓦などがある
軒丸瓦は三巴文、軒瓦は均整唐草文である

岩切の中世豆知識

いたび 板碑

板碑は石製の供養塔です。梵字(古代のインド文字)で仏を表し、右の拓本のように建てた人やその趣旨、年月日が刻まれていることもあるので中世の歴史を探る格好の史料です。岩切地区は太白区の柳生から名取市にかけての地区とともに東北地方有数の板碑分布地で、東光寺遺跡のある丘陵を中心に死者の冥福を願う板碑が約二百基分布する他、七北田川流域の平地には、生前に死後の冥福を祈る板碑が数十基分布しており、当時の居住地域や道筋を推定することができます。

板碑は元の位置から動かされやすいものですが、東光寺遺跡では当時の霊場としての景観をほぼ保っており貴重な遺跡です。

しゆく 市場と宿

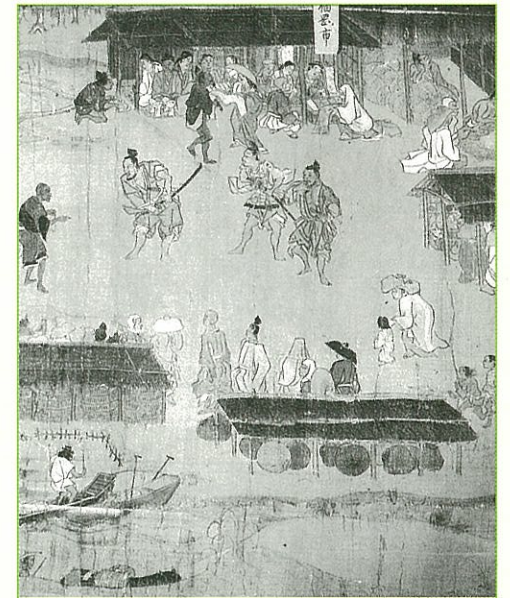
物資の交換の場所である市場は鎌倉時代の文献に「冠屋市庭」「河原宿五日市庭」という名で現れます。これらの市場は水運の盛んな七北田川沿いの主要道路の近くに位置し、町場を形成して、多くの商人・職人や芸民が活動していたと考えられています。これらの人々の宿泊や交通の便のための「宿」も「河原宿」の名のようにつか設けられました。

なお、市場の場所については諸説がありますが、七北田川南岸の鴻ノ巣遺跡や北岸の洞ノ口遺跡周辺はその推定地の一つです。



●羽黒前遺跡の板碑

高さ111cm 安山岩(拓本は『仙台市史 板碑』から)
梵字(キリーク)は阿彌陀如来を表す。正応二(1289)年、藤原高泰(留守氏か)が亡き父の極楽往生を願って建てたということがわかる。



●河原で開かれた市のようす

【『一遍上人絵伝』】
魚・鳥・米・布などあらゆる日常品が売られ、さまざまな商人がいきかう。川舟から荷がおろされようとし、道を荷を積んだ馬が通る。

4. 館跡 — 洞ノ口遺跡 —

どうのくち

中世の岩切の繁栄

岩切城跡(国史跡)

霊場—東光寺遺跡

館跡—洞ノ口遺跡

屋敷跡群—
今市・鴻ノ巣遺跡など

おわりに

遺跡はJR岩切駅の北側に広がっています。発掘調査によって七北田川に近いやや小高い地区から多数の溝跡、掘立柱建物跡、井戸跡、土坑(大きな穴)などからなる戦国時代の館が見つかりました。館は室町時代前半に造られ、区画する溝がしだいに大きくなり、外堀も追加されて大規模な戦国時代の館として整備されました。最盛期には南北200m、東西300mくらいあり、この地域の領主であった留守氏の館と考えられています。館の跡の下層では鎌倉時代の屋敷跡が見つかっています。また、北から東側にかけての低地では古代から近世に至るまで水田が営まれています。



館の堀の様子

古代から近世に至るさまざまな遺物が約10万点も出土しました。中世の遺物には中国産の青磁や白磁、国内産の陶器、瓦質や土師質の土器類の他、鉄・銅・石・木製品などの多様な製品があります。食事をする時の用具や貯蔵・調理具、暖房具(かいろのように使う石製品など)や履物などの日用品、農工具や漁労具、武器、茶器の他、塔婆(供養のための塔)、仏像(木製の仏像)、まじないやお経を墨書きした木の札など信仰に関わるものなどがあり、当時の暮らしを物語っています。



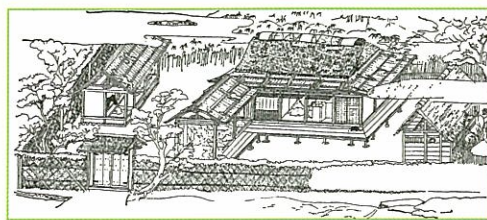
洞ノ口遺跡の空中写真【1961年 国土地理院】



西の上空から見た発掘調査区

■中世の屋敷のようす

南北朝時代になると、屋敷が大規模になり館(やかた)と呼ぶにふさわしいものが多くあらわれます。



鎌倉時代の屋敷のようす【平井聖「日本住宅の歴史」より】



室町時代の屋敷群のようす【多賀城市新田遺跡の想像図 多賀城市教育委員会】



まじない用の木の札

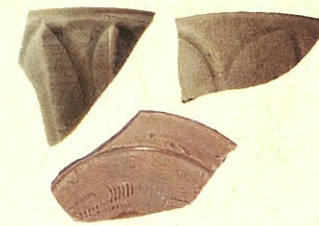
地藏菩薩像(木造・約20cm)

木製五輪塔(約15cm)

柁に打ち付けられた七枚の塔婆

経文などを書いた木の札

瓦質の火鉢(箱状をしている)



中国(龍泉窯)産青磁碗・皿



中国産白磁合子



朝鮮通宝



元豊通宝

永楽通宝



洪徳通宝(ベトナム)

日本と中国の主なやきものの窯

□は仙台にもちこまれたやきものの窯



地元(白石)産播鉢

墨絵のかわらけ

瀬美産壺

常滑産壺

瀬戸・美濃産天目茶碗

瀬戸産花瓶

硯

瀬戸産平碗

鉄製の火打金

紡錘車(輪が木製・軸が鉄製)

鉄製の釘

木製のヘラ(漆布が巻き付く)

鉄製の鎌

短刀



漆器椀



曲物の容器



下駄

草履の芯



銅鏡

洞ノ口遺跡の出土遺物

5. 屋敷跡 — 今市・鴻ノ巣遺跡など —

中世の岩切の繁栄

岩切城跡(国史跡)

霊場—東光寺遺跡

館跡—洞ノ口遺跡

屋敷跡群—今市・鴻ノ巣遺跡など

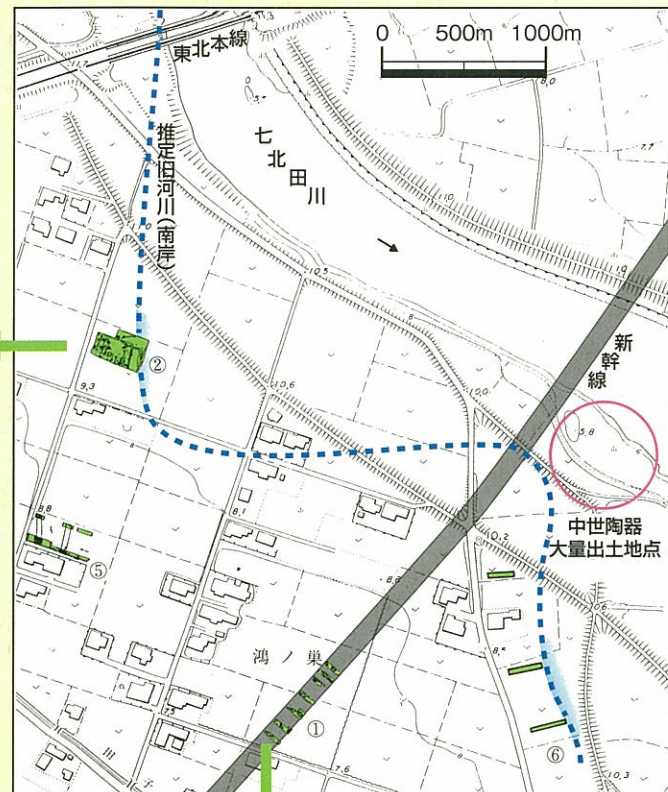
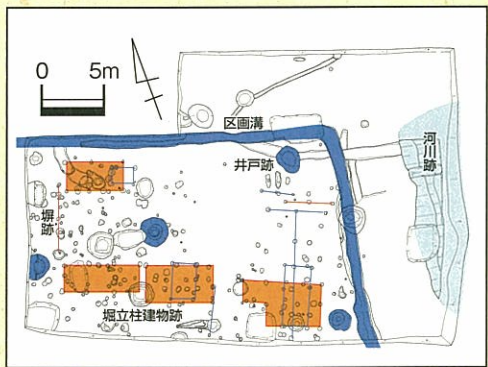
おわりに

七北田川の南岸、今市橋の東南方には今市遺跡があります。一部で発掘調査が行われ、中世の掘立柱建物跡・井戸跡などが確認されていることから集落があったと考えられます。鴻ノ巣遺跡は今市遺跡の東南方に長さ約1kmにわたって広がる大きな遺跡です。何回かの発掘調査により古墳時代の規模な集落跡の上層で中世の屋敷跡がいくつも確認されています。屋敷は溝で区画され、住居や倉庫と考えられる大小の掘立柱建物と井戸などから成っています。

二つの遺跡、特に鴻ノ巣遺跡からは大量の鎌倉時代の陶磁器が出土しています。その中でも常滑(現在の愛知県)産や白石(宮城県)産とみられる陶器の甕(貯蔵用など)やこね鉢(調理用)が最も多く出土しています。次いで、中国産の青磁や白磁の碗や皿も多く出土しています。これらの陶磁器は太平洋航路を経由して川船に乗り換え、七北田川をさかのぼってもたらされたと考えられています。したがって、これらの遺跡やその周辺に当時の川港(津)や市場があったと思われます。



鴻ノ巣遺跡の屋敷跡
溝は屋敷の区画、丸い大きな穴は井戸、小さな穴の多くは柱穴



鴻ノ巣遺跡の屋敷跡と出土遺物

6. おわりに

静かな田園が広がっていた岩切地区は区画整理事業などにより、今、大きく変貌しつつあります。やがて、新しい町並みができてくることでしょう。

その岩切地区には約800年前の鎌倉時代には、霊場のある丘陵と船の往来する七北田川のもと、にぎわう町場や市場があったのです。緑豊かな環境とともに残された国史跡の岩切城跡や東光寺遺跡などの貴重な遺跡群はその証しとして、地域のみならず市民の皆様のご理解とご協力をいただきながら、保存し、活用してまいりたいと考えております。



中世略年表

(太字は岩切地区に関わる事)

1143(康治二年)	「多賀国府」の呼び名が初めて史料に現れる
1189(文治五年)	源頼朝が「多賀国府」に入る(奥州藤原氏が滅びる)
1192(建久三年)	源頼朝が征夷大将軍となる
1274・1281(文永十一・弘安四年)	元(中国)が来襲する
1275(文永十二年)	「岩切分荒野七町絵図」が作成される
1278(弘安元年)	このころから岩切の丘陵部で板碑が建てられる
1285(弘安八年)	「冠屋市庭」「河原宿五日市庭」の名が史料に現れる
1333(元弘三年)	鎌倉幕府が滅びる
1334(建武元年)	建武の新政がおこなわれる
1336(建武三・延元元年)	南北朝の対立が始まる
1337(建武四・延元二年)	陸奥国府が足利方の手中に入る
1350(観応元・正平五年)	この頃の「塩竈神社文書」中に「東光寺」「岩切堂塔」の記述がある
1351(観応二・正平六年)	奥州管領吉良貞家、畠山高国・国氏と戦い、勝利する 北畠顕信が「府中城」に入る
1352(文和元・正平七年)	奥州管領吉良貞家が「多賀国府」を奪回する
1354(文和三・正平九年)	斯波家兼が奥州管領となり、大崎に拠点进行
1392(明德三・元中九年)	南朝と北朝が一つになる
1419(応永二十六年)	五日市場・上町・下町・洞ノ口・新田などの名が史料に現れる
1467(応仁元年)	応仁の乱がおこる
1570(元龜元年)	留守政景が本拠を岩切城から利府城(村岡城)に移す
1573(天正元年)	室町幕府が滅びる